

# ECM 構文における随意的移動分析の再考

白井 悠香

## 0. 概要

ECM 構文では、補部節主語が例外的に主節動詞から対格を付与される。先行研究では、補部節主語の主節への移動が義務的なのか、随意的なのかという問題が議論されてきた。本研究では、Chomsky (2013, 2015, 2020) のラベリング理論の観点から、日本語と英語の ECM 構文の随意的移動分析を再考する。英語の ECM 主語は義務的に移動する一方、日本語の ECM 主語の移動は随意的であることを示す。

## 1. 提案

### 1.1. 英語の ECM 構文

まず、英語の ECM 構文について考える。本研究では Sugimoto (2021) に従い、非定形節である ECM 補部は、(1b) に示すように、T の C への external pair-Merge により C のフェイズ性が取り消された状態で派生に入ると想定する。(1c) で、補部節主語 *Mary* は  $vP$  指定部から主節の R 指定部へ移動する。フェイズ主要部  $v^*$  と *Mary* との間で一致が生じ、(1d) で、R は  $v^*$  から素性を継承する。 $\delta$  と  $\varepsilon$  のラベルはそれぞれ R、 $\langle\varphi, \varphi\rangle$  と決定する。

- (1) a. John believes Mary to be innocent.  
b.  $\{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Mary} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}$   
c.  $\{\eta \text{John} \{\zeta v^*_{[u\varphi]} \{\varepsilon \text{Mary}_{[\varphi]} \{\delta R \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Mary} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}\}$   
↑  
d.  $\{\eta \text{John} \{\zeta v^* \{\varepsilon \text{Mary}_{[\varphi]} \{\delta R_{[v\varphi]} \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Mary} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}\}$  ( $\alpha = \beta = R - v^*$ ,  $\gamma = T - C$ ,  $\delta = R$ ,  $\varepsilon = \langle\varphi, \varphi\rangle$ )

次に、補部節主語が元位置にとどまる派生を考える。(2) のように、フェイズ主要部  $v^*$  と *Mary* との間で一致が生じる。しかし、*Mary* が基底生成した位置である  $\beta$  node では、XP-YP 状況が生じ、共有素性もないため、ラベルを決定できない。また、弱主要部と想定されている R の強化が行われず、 $\delta$  のラベルも決定できない。したがって、英語の ECM 構文において補部節主語が元位置にとどまる場合、派生が収束しない。

- (2) a.  $\{\zeta \text{John} \{\varepsilon v^*_{[u\varphi]} \{\delta R \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Mary}_{[\varphi]} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}$   
b.  $\{\zeta \text{John} \{\varepsilon v^*_{[v\varphi]} \{\delta R \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Mary}_{[\varphi]} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}$  ( $\alpha = R - v^*$ ,  $\beta = ??$ ,  $\gamma = T - C$ ,  $\delta = ??$ )

### 1.2. 日本語の ECM 構文

次に、日本語の ECM 構文について考える。本研究では、Saito (2016) に従い、日本語の格マーカは anti-labeling device として機能し、格標示された要素はラベルづけにとって非可視的となると想定する。さらに、Moritake (2024) に従い、日本語の格付与メカニズムは上方一致によって行われ、unvalued な格素性を有する名詞句は、フェイズ主要部  $v^*$ 、C との上方一致の結果、それぞれ対格、主格を与えられると想定する。

日本語の ECM 補部の構造は、(3b) に示すように、英語と同様、T の C への external pair-Merge により派生すると想定する。(3c) で、補部節主語 *Hanako* は  $vP$  指定部から主節の R 指定部へ移動する。(3d) で、*Hanako* はフェイズ主要部  $v^*$  との上方一致により対格を付与され、その後 R は  $v^*$  から素性を継承する。対格を付与された名詞句 *Hanako* はラベルづけに寄与しないため、 $\delta$  と  $\varepsilon$  のラベルは R と決定する。(ここでは、Saito (2016) に従い、 $v^*$  の Merge によって R のカテゴリーが決定し、強化されると想定する。)

- (3) a. Taroo-ga Hanako-o tensai da to omot-tei-ru.  
Taroo-NOM Hanako-ACC genius be that think-Prog-Pres  
'John thinks that Bill is genius.'  
b.  $\{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Hanako} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}$   
c.  $\{\eta \text{Taro} \{\zeta v^*_{[ACC]} \{\varepsilon \text{Hanako}_{[uCase]} \{\delta R \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Hanako} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}\}$   
↑  
d.  $\{\eta \text{Taro} \{\zeta v^* \{\varepsilon \text{Hanako-ACC} \{\delta R_{[ACC]} \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{Hanako} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}\}$  ( $\alpha = \beta = R - v^*$ ,  $\gamma = T - C$ ,  $\delta = \varepsilon = R$ )

補部節主語が主節へ移動しない場合も、(4b, c) のように、*Hanako* は  $v^*$  との上方一致により対格を付与される。英語の ECM 構文の場合に問題となっていた  $\beta$  のラベルに関して、Saito (2016) に従い、格標示された名詞句はラベルづけに寄与しないと考えると、 $\beta$  において  $R - v^*$  のラベルが付されることとなる。さらに、 $\delta$  のラベルは R と決定できる。したがって、日本語の ECM 構文では、英語と異なり、補部節主語が主節へ移動しなくとも、ラベルの問題が生じることはない。以上より、日本語の ECM 主語の移動は随意的であると考えられる。

- (4) a.  $\{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{ Hanako } \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}$   
 b.  $\{\zeta \text{ Taro } \{\epsilon v^*_{[ACC]} \{\delta R \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{ Hanako}_{[uCase]} \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}$   
 c.  $\{\zeta \text{ Taro } \{\epsilon v^* \{\delta R_{[ACC]} \{\gamma \langle T, C \rangle \{\beta \text{ Hanako-ACC } \{\alpha \langle R, v^* \rangle \dots\}\}\}\}\}\}$  ( $\alpha = \beta = R - v^*$ ,  $\gamma = T - C$ ,  $\delta = R$ )

## 2. 分析

### 2.1. 英語の ECM 構文

Lasnik (1999)は、*make out* 構文等の事例より、英語の ECM 構文における補部節主語の移動は随意的であると主張する。他方、den Dikken (2015)は、補部節にとどまっているように見える ECM 主語は、実際には音形を持たない補文標識 *for* により格を与えられていると論じている。本研究では、den Dikken (2015)を援用し、英語の ECM 主語の移動は義務的であり、*make out* 構文は  $\langle T, C \rangle P$  または *for* を主要部とする CP を補部にとると考える。後者の場合、補部節において主語と T との間で一致が起こると考えると、ラベルの問題は生じない。

### 2.2. 日本語の ECM 構文

Hiraiwa (2001)は、(5)に示すように、補部節を修飾する副詞が ECM 主語に先行できることから、日本語の ECM 主語の移動は随意的であり、元位置にとどまることができると論じている。

- (5) John-ga [gakkyuu-iin kurai Mary-ga/o majime da] to omotta.  
 John-NOM class-representative as Mary-NOM/ACC earnest is that think-PST  
 ‘John thought that Mary was as earnest as a class representative.’ (Kobayashi and Maki (2002: 218))

これを踏まえ、以下、ECM 構文において、対格主語が移動を伴う場合と補部節にとどまる場合とで振る舞いが異なるという事実から、本構文の随意的移動分析が支持されることを示す。

#### 2.2.1. 焦点を伴う ECM 主語

対格主語は、focus particle *dake* を伴うことが可能である。しかし、補部節を修飾する副詞の挿入により、容認度に差が生じる。(6)に示すように、*dake* を伴う対格主語が補部節副詞に後続する場合、容認度は低下する。したがって、焦点要素を伴う対格主語は、義務的に主節の R 指定部へ移動し、焦点一致を行う一方(Miyagawa (2013))、対格主語が補部節にとどまる場合は、焦点要素が認可されず、容認されないと考えられる。

- (6) \*? John-ga [gakkyuu-iin kurai Mary-dake-o majime da] to omotta.  
 John-Nom class-representative as Mary-only-Acc earnest is that think-PST  
 ‘John thought that only Mary was as earnest as a class representative.’

#### 2.2.2. 二重対格制約

Hiraiwa (2010)は、文中に複数の対格名詞句が生じると容認度が低下する事実を、「構造格の対格が、単一の Spell-Out 領域において具現化することは許されない」と説明する。補部節に別の対格目的語が存在する場合、(7b)のように、対格主語に先行する補部節副詞を挿入すると、(7a)と比較して容認度が低下するが、(7c)のように、対格主語に後続する主節副詞を挿入した場合には容認度の低下は見られない。これは、対格主語が元位置にとどまる(7b)では、対格を付与された二つの名詞句が単一の Spell-Out 領域に含まれる一方、対格主語が主節へ移動する(7c)では、二つの対格名詞句は別の Spell-Out 領域に含まれることになるためであると考えられる。

- (7) a. ?? Ken-ga Naomi-o gengogaku-o aisite-ir-ru to omot-tei-ru.  
 Ken-NOM Naomi-ACC linguistics-ACC love-Prog-Pres that think-Prog-Pres  
 ‘Ken thinks that Naomi loves linguistics.’  
 b. \* Ken-ga [kokoro-no soko-kara Naomi-o gengogaku-o aisite-ir-ru] to omot-tei-ru.  
 Ken-NOM heart-GEN bottom-from Naomi-ACC linguistics-ACC love-Prog-Pres that think-Prog-Pres  
 ‘Ken thinks that Naomi loves linguistics from the bottom of her heart.’  
 c. Ken-ga Naomi-o orokanimo [gengogaku-o aisite-ir-ru] to omot-tei-ru.  
 Ken-NOM Naomi-ACC stupidly linguistics-ACC love-Prog-Pres that think-Prog-Pres  
 ‘Ken thinks stupidly that Naomi loves linguistics.’

主要参考文献 Chomsky, N. (2015) *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, 1-16. / Hiraiwa, K. (2001) *MIT Working Papers in Linguistics* 40, 67-80. / Saito, M. (2016) *The Linguistic Review* 33, 129-175. / Sugimoto, Y. (2021) *Studia Linguistica* 75, 150-164.